

評価委員会総合評価

研究課題名：異常気象・気候変動の実態とその変動要因に関する研究

評価委員

委員長：田中正之

委員：蒲生俊敬、中島映至、田中 佐、田中 博、渡邊朝生

評価年月日：平成 25 年 11 月 14 日

1. 総合評価

- 非常に優れた研究であった。
- 優れた研究であった。
- 研究を実施した意義はあった。
- 失敗であった。

2. 総合所見

本研究は、地球温暖化の進行に伴い、中長期的な気候変化、異常気象、極端現象の発生に関する社会的な関心の高まりを背景に、異常気象の頻発と地球温暖化等の気候変動との関連性について明確な科学的見解が求められる中、気象庁の長期再解析データと極値統計手法を駆使し、異常気象現象の定量的把握とその要因解明及び異常気象の変動と関連が深いと推定される長期的な気候変動とその要因、異常気象との相関の解明を目指したものである。

本研究により、異常気象・気候変動を定量的に解析するための基盤データである長期再解析データセット（JRA-55C 及び JRA-55AMIP）が整備されたほか、異常気象と長期気候変動の実態と要因について多くの統計的知見が得られた。これらの成果は、今後の気候関連業務の高度化の基盤をなすものとして高く評価する。

具体的には、温暖化に伴う領域気候変化現象等の解明が進んだ点、異常気象や極端現象の統計的な取扱い手法が確立された点、研究期間中に発生した 2010 年夏季の猛暑を対象にした発生原因の評価を行った点が挙げられるほか、気候業務の高度化への取り組みや、外部への情報発信も適宜行われ、顕著現象に関する報道対応を含めて必要とされる役割を果たしたものと評価する。

以上のことから、本研究は、適切な目標設定のもと概ね適切な研究体制で実施され、当初想定した成果が得られた優れた研究であったと評価する。

地球温暖化の進行に伴い、中長期的な気候変化、異常気象、極端現象の発生に関する社会的な関心は益々高くなることから、異常気象の原因解明についてより多面的な解析を行うなど、今後も継続的に取り組み、更なる進展を期待する。